時計製作への オマージュ

ジュネーブ、パリ、ロンドンの3都市にある
パテック フィリップ・サロンは、単なる時計販売店とは
趣を異にする。近年改築されたこの3店は、
パテック フィリップの伝統と革新の融合を
体現すると共に、各都市の持つ象徴的な価値を
重んじた美しい内部装飾を誇っている。

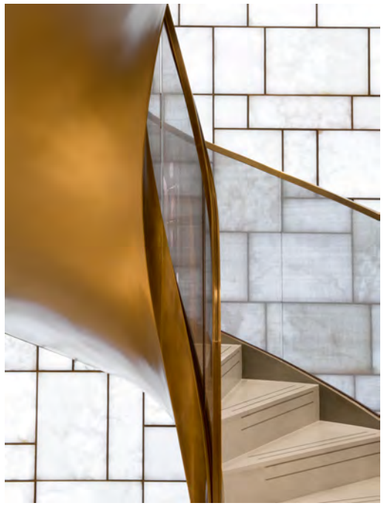
文 ニック・フォークス　写真 リー・モーズレー　翻訳 小金井 良夫

19世紀後半以来、世界の動きは加速した。今日、当時のままのものはあまりないといってもよいが、例外はある。あなたが1853年にジュネーブにやって来て、パテック フィリップの所在地を尋ねたとしよう。そして奇跡的な長寿のお蔭か、タイムトラベルによって今日、この湖畔の都市を再び訪問し、同じ質問をしたとする。いずれの場合も、あなたが案内されるのはローヌ通りの同一の瀟洒な建物である。

パテック フィリップは1850年代を順調なスタートで迎えた。事業の発展に伴い、より広いスペースが必要となったため、1853年、ローヌ通りにあった建物の2つのフロアを賃借し、ここに本社を移した。当初は15年の賃借契約であったが、この建物は以後162年にわたってパテック フィリップ、そしてジュネーブと切り離すことのできない重要な要素となるに至る。

歴史的に本社兼工房であったこのローヌ通りの建物は、今日、顧客のために開放されている。「サロン」と略称され、パテック フィリップの魂が宿る第2の「ホーム」として親しまれている。他の多くの時計ブランドと異なり、パテック フィリップは、自社所有のブティックで世界中を埋め尽くすことを自己目的とはしていない。パテック フィリップは、エレガントでシンプルなものから超複雑タイムピースに至るまで、すべての範囲にわたる時計を製作する伝統的な時計メーカーとして、各国の販売店との緊密な関係を重視する。販売店の中にはパテック フィリップ以上に長い歴史を持つものもある。

しかしそれと同時に、パテック フィリップは世界中で3つの都市に、自社とその製品を体現するものとしての直営店を置くことを選んだのである。各々の直営店は、その立地する都市の性格を反映しており、それがパテック フィリップになお一層豊かな次元を与えている。世界に3つしかないということが、パテック フィリップ・サロンを、その顧客同様、特別でユニークなものにしているのは明らかであろう。



ボンド・ストリートにある
ロンドン・サロンは、昨年12月に
改築オープンし、床面積が
85 m²から420 m²へと
拡張された。設計にあたった
パリの設計事務所AW²は、
落ち着いた高級感を
創出するため革、雪花石膏、
プラタナス、真鍮を素材とし、
コーヒーとクリームのトーンを
基調とした。アール・デコ様式を
コンテンポラリーに
再解釈した創作デザインを
キューブ型シャンデリア（上）や
螺旋階段（右端）に見ることが
できる。

パテック フィリップ・パリ・サロンの店長は、香港在住のある顧客について語ってくれた。ミニット・リピーターを発注したその顧客は、パリにやって来た。到着したその朝に、彼の新しい宝物を見るためにサロンを訪れた。彼はスライドピースを動かし、時を告げる魅力溢れる音色を聞き、晴れ晴れとした微笑を浮かべ、時計を受け取らずにサロンを出た。彼は翌日もサロンに来て時計の音色を聞いた。その翌日も、さらにその翌日も彼はやって来た。新しいミニット・リピーターの音色を試聴するのに、サロンの店内以上に理想的な場所を彼は思いつかなかったのである。そして時計を受け取る楽しみをできるだけ先に延ばした彼は、出発の日になって初めて時計を受領したという。

パテック フィリップ・サロンは特別な人々のための特別な場所であり、もちろんその筆頭はジュネーブ・サロンである。この建物は当時、最上階の時計製作工房で素材や荒削りの部品を完璧な時計につくり上げるために必要な多数の職能を一堂に集めていただけではない。その時計を販売するために必要な技術とノウハウ、そして理想的な環境も集約していたのである。コルドバ革の張られた壁面、名高い金庫、煌めくクリスタルのシャンデリアなど、重厚なベルエポック時代の内装は、今日も当時のままに再現されている。エントランス・ホールは、新たに1、2階吹き抜けのショールームとなり、壁面にはタイムピースを展示したショーケースが並んでいる。

19世紀当時のものよりもさらに壮大なシャンデリアの照明を受けたサロンは、印象的なだけではない。居心地のよい店内は、タイムピースを購入する場所というよりはむしろ、それを見て体験する場所、そしてくつろぐことのできる場所となっているのである。

パテック フィリップの哲学によれば、時計メーカーの役割は、世界のどこにおいても顧客の伴侶となるタイムピースを提供することである。歴史的本社がサロンに改築されることになった時、建築家とデザイナーに与えられた指示は、パテック フィリップの現行コレクションのすべてを常時展示できる環境をつくる、ということであった。

しかしここで重要なことは、2006年の改築オープン以来、ローヌ通りのサロンがパテック フィリップの製作するタイムピースを展示する場所以上のものとなったことである。サロンは、パテック フィリップを成り立たせている文化を理解させる場ともなったのである。展示されているレマン湖を描いた油彩画は、フィリップ・スターン名誉会長の個人コレクションによるものである。2階のガラス窓の向こう側では、時計製作者たちがプラン・レ・ワットの本社工房と同じ環境で作業をしている。また往時は選び抜かれた時計製作者と調整師が市街を見下ろしながら仕事をしていた陽光の溢れる最上階では、世界中からやって来る愛好家、コレクターを主賓とするディナーや昼食会が催されている。

ローヌ通りの雰囲気をフランスの首都にもたらした、ヴァンドーム広場のパリ・サロンでも同様の体験を味わうことができる。世界的に有名な広場の一角を占める建物の、窓の並ぶファサードは地味である。ジュネーブ・サロンを首相官邸に例えるならば、パリ・サロンは大使館に近いものがある。ここでもパテック フィリップの世界は忠実に再現されている。著名なウィンドウ・ディスプレイはローヌ通りのジュネーブ・サロンのものからインスピレーションを得ており、ガラス窓の向こう側では、ひとりの時計製作者が同じ秩序正しい静穏な環境の中で作業をしている。そしてリュールマン風の精緻に装飾された家具調度は、やはり落ち着いたエレガンスに溢れるジュネーブ・サロンをよく知る人々には、一目で親しみを感じさせるものであろう。

またジュネーブ・サロンはレマン湖を見下ろす、きわめて開放感に溢れた空間であるのに対し、パリ・サロンは象嵌細工の希少な宝石箱に例えられよう。見事にデザインされた家具調度と壁は、アール・デコ最盛期のオリエント急行に見られた客車の豪華な内部装飾を思わせる。プライベートルームのひとつから、アガサ・クリスティーの小説の登場人物が出てきても違和感はない。この場所が過去には銀行として使われていたことを想起させるものは、地下に残された金庫のみである。パリ・サロンは、格式を守りつつ親密な雰囲気を演出するのに見事に成功し

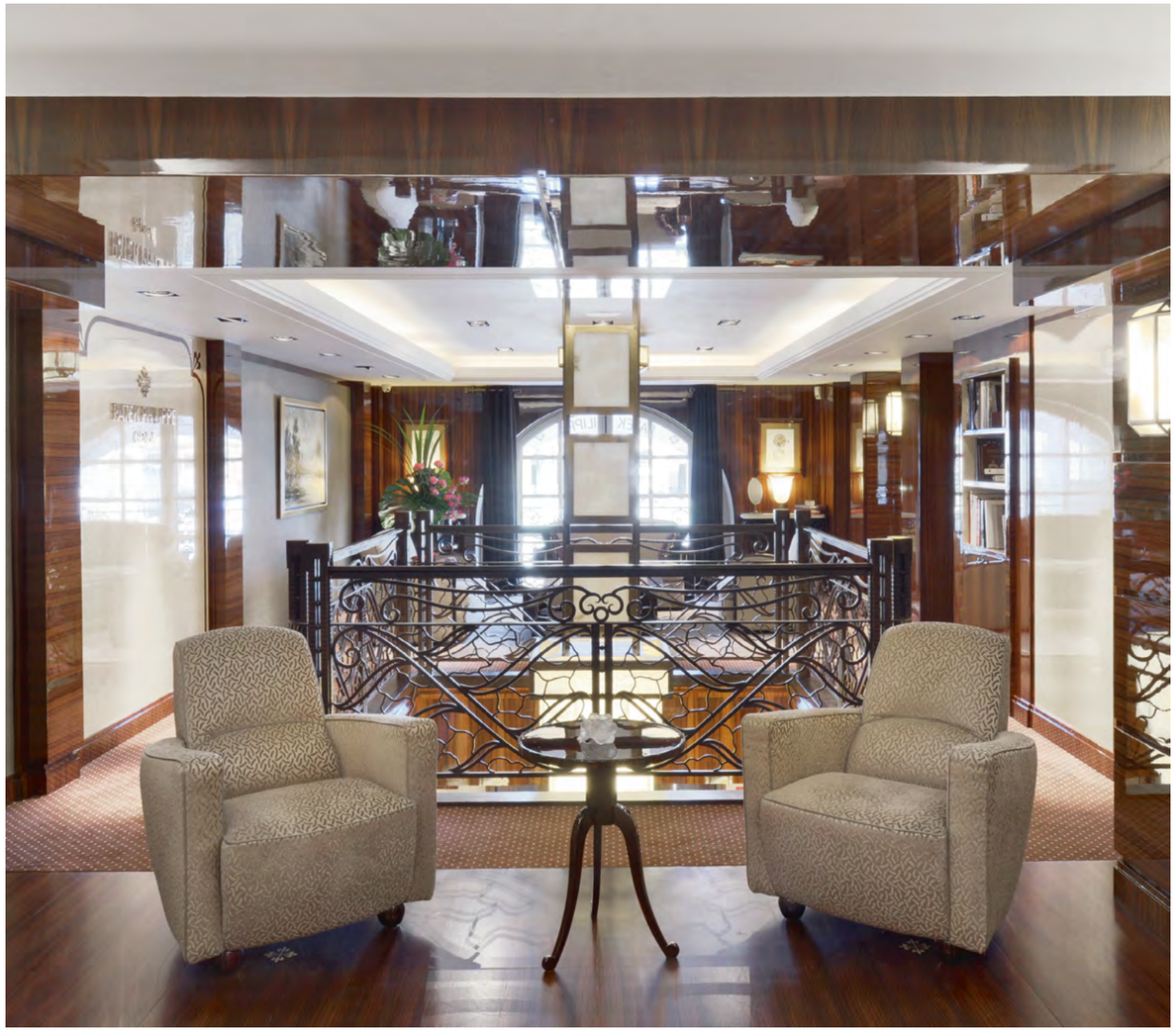
ており、そこはかとない伝統的なフランスらしさも感じさせる。

一方、新たに改築オープンしたロンドン・サロンには、言うにいわれぬイギリスらしさが見受けられる。今世紀に入ってからロンドンは、世界の十字路として伝統とコンテンポラリーが競合する活気に溢れた都市に変貌した。ボンド・ストリートにあるロンドン・サロンのクールでエレガントな雰囲気には、この2つの要素が融合されている。ロンドン・サロンは長年の間、床面積わずか85平方メートルの小さな店舗であったが、2014年の工事完了により、床面積はほぼ5倍に拡張された。

しかしロンドン・サロンに入店して驚くのは、店のサイズではない。それは光である。2本の道路が交差する角地に位置するため、窓が2方向にあるという幸運に恵まれている。この透明で光に溢れる空間が世界を迎え入れる。ミニット・リピーター購入の相談のため、十数時間もここで過ごす紳士もいれば、愛用のTwenty-4®のバックルを調整するために午後のショッピングのついでに立ち寄る、エルメスのバッグを腕にした気取った婦人もいる。

パリ、ジュネーブ・サロンと同じくここでも、すべての人々が親しみを込めた敬意を持って迎えられ、時刻が許せば、極上のアールグレイ・ティーをすすめられる。そしてパステルカラーとミニマリズムのエレガンスが支配的なこの空間にも、重厚なジュネーブ・サロンを思わせる巧みな手法を見ることができる。それは、壁面を覆う淡い色の革の、起伏と装飾の入った表面にまで及んでいる。いわばジュネーブ・サロンのコルドバ革にコンテンポラリーな再解釈を加えたものとなっているのである。

しかしながら、これらの場所を特別なものとしているのは、内装デザインや立地条件ではない。そこで働く人々と、そこに展示されているタイムピースであることはいうまでもない。❖



パステルカラーと
ミニマリズムのエレガンスが
支配的なこの空間にも、
重厚なジュネーブ・サロンを
思わせる巧みな手法を
見ることができる。

［前見開きページ］ジュネーブ・サロンは、Groupement d'architectes SAが設計を担当し、2年にわたる改築工事を終えて2006年11月に改築オープンした。新しい1、2階吹き抜けのショールームには、全長4.9 mのシャンデリアが設置された（中央）。ショールームに続き、ナポレオン三世様式の歴史的サロン（左）がある。ここには19世紀に製作されたオリジナルのシャンデリアが使われている。6階のプライベート・サロン（右）からはレマン湖を一望にできる。［本見開きページ］パリ・サロンは2009年9月に改装オープンした。Alpha Internationalが設計を担当。親密な雰囲気を演出し、家具調度と壁はアール・デコ様式によりデザインされている。